

# 海山

うみやま

草壁焰太五行歌集



# 海山

うみやま

草壁焰太五行歌集

海山

## はしがき

この歌集は、私の第四番目の五行歌集に当たる。私は『心の果て』を第一冊目と考  
えたいところがあった、これを第一としていたが、以前に出した『穴のあいた麦藁帽  
子』がどうみても五行歌集なので、今回から正規にこれを第四歌集とすることにした。  
第三歌集の『川の音がかすかにする』が十年前であるから、時間が経ちすぎたと思っ  
ていた。五年前ほどに一冊出しているのが順当であった。

というのも、この十年は雑誌『五行歌』を創刊してからの十年であって、私の五行  
歌の最も多作の時期に当たり、しかも、自分の作品で会を引っ張ろうという意欲に燃  
えていた時期でもあった。

したがって、材料は非常に多く、ざっと計算しても一万首を超える作品や、草稿が  
あった。今回、一応はそれらに目を通したつもりであるが、見えていない草稿がどこ  
かのダンボール箱にどっさりあるはずだという気もする。

実際、やってみると、予想通り作品数が多すぎると思った。書き出したものが一千  
八百首、このうち四百十六首に絞ったが、絞る過程でいわゆる雑詠の感じのものをほ  
んど捨てることになった。ということは、やや現実感を透過したような歌が残り、

全体の印象に比べて、透明になり、ざらざらしたものを抜くことになった。

もっと気楽な歌があってもとは思いますが、比べてみると、やはり落としてしまう。だいたいまとまってから、『五行歌』本誌を何冊か見てみると、ほとんどの歌が落ちていく。思わず笑ってしまった。

こういう詩歌集作りは、いままでにあまりなかったように思う。

私がこれに満足しているのかどうか、実作者というものは貪欲なもので、なかなか満足しないものはあるが、気持ちはそう揺れ動かない。これが悪ければ、私が悪い。最も多作で最も意欲的だったまる十年を三十分の一に凝縮したものであるから、いまさらどう言っても仕方がないのである。

未発表作、大幅に改作した作品は、合わせて五十四首に及んだ。草稿からこれを拾い出すのは楽しかった。

私は若年の頃から、恋歌を大変にたくさん書いた。恋の詩、恋の歌を書いた量については、いままでにくらいではないかと畏れる。

このところの発表作品は、思い、心、叙景が中心で、どうも詩歌としてのみずみずしさに欠けるところもあり、恋歌の多くは書いていて発表しなかった。歌集に水分、熱量を与えるため、今回はこの系統の作品も載せることにした。実際には、これがあるのが、私の本体である。

したがって、この歌集は最初『海山』とタイトルを決めてイメージしたものよりは、

正直なものとなった。私自身、五行歌の講演をするときに、実は私には課題があつて、五行歌のリーダーとしての立場で歌を発表するか、自分をうたびとのほうへ追い込んでいくために、正直にやっていくか、大きな悩みがあると話すことも多かつた。

私は、後者をとることにした。というのも、五行歌のリーダー、つまり五行歌の会の主宰という立場が、五行歌が流行するに従つて、だんだんものしくなり、どこへ行つても「主宰、主宰」と言われ、私はまいていた。

会を始めるときは、自分の信念を通し、最も公平で正しい運動をするために、そういう立場が必要だと思つたのだが、五行歌の会の歌会に三千人もの方々がくるような事態となつては、自分の意識のほうが、運動にとらわれていることが多く、作品を発表するにも多少は制約されるところがあつた。

しかし、だんだんに、私は五行歌の会の運営者としての責任からのがれ、より自由にすべきだと思ひ始め、三年以内に妻の叙子に主宰を譲り、私自身は放浪の準備をすることにした。

とは行つても、地方での五行歌雑誌作りなどをしたかと思つてゐるが、とにかく歌を書く者として、もっと自由きままにやっていたいけるだけの可能性が出てきた。実際に、私の関心から、五行歌の会のことは、すこしずつ抜けてきており、今度の歌集で、かなり私の関心の方向は変化した。

五行歌はすでに、後継者がいる状態であると感じてゐる。それも十数人はゐる。だ

から私がとやかく言わなくても、なんとか出来る状態になっている。

現在、五行歌人口は俳句の八%程度と見ているが、雑誌は〇・五%にも満たず、基点の少ないのが問題である。これと、私の自由とを合算するような方向へ行きたいと私は思うようになった。

つまり正直な歌集を作ったということは、主宰という役割を捨て、うたびとの方向へ行くという本来の野心の表明でもある。

この十年の作品の特徴は、明るいことであった。いままでのものに比べて、相当に明るい。これは自分の思想がそう変化してきたということであり、運動はこの間に比べものにならないくらい大きく、豊かなものになった。それが私の信念を強め、明るい気持ちにさせたとも言えることができる。それでよかったのかどうか、後になってみないとわからない。

作品の重複を避けるため、先日、『川の音がかすかにする』を読んでみて、どうしてこんなに悲しい作品が多かったのかと思った。十年経ってみないとわからないことがある。

私は、自分の今後の歌作りは相当難しいのではないかと、思っている。この歌集の刊行日に私は六十七歳になる。元氣さについて、いままではピークを更新しつづけてきたが、やっと下り坂に入る感じでもないではない。ここが難しいところである。

ある時期以降、うたびとは年齢のことはかり書くようになる。多くの人が年齢をテーマとするようになる。私はこれを内なる意識のなかに生じないようにしたいと思う。それがどこまで出来るかは、私の内なる熱が、いかに何に向うかということによって決まるであろう。

私は、自分の生涯のために最もしたいことをして、その熱を生み出したいと思う。さいわい、発想力はいまでも生きていると思う。毎日自分では新しいと思う考え方が起こる。この残った力を最大限に生かして、思想的に成熟するのが第一かとも思うが、放浪、基点作り、思想的な成熟がどこで一致するのか、私自身のちよつと変化してきた目的感による進み方が楽しみでもある。

この十年、私は一万人の五行歌人を作った。つまり、大変、多くの方と知り合った。その多くの方が大変に私を助けてくれた。歌一首一首にこの間、私を助けてくれた人、風景を見せてくれた人の顔が浮ぶ。私自身も五行歌運動も、その人たちに助けられ、五行歌がこんなに普及した。各歌会の代表の方々、その他多くの方々に深く感謝する。この本の装丁は書家で、九州歌会の五行歌人、寺本一川さんにお願ひした。大変に急がせて申しわけなかったと思う。

『心の果て』以来恒例になっているため、作品のうち四十二首を自分の手で書いた。



実は題字も書くようにと寺本さんは言って下さったが、これは駄目だと思った。彼女の書を見ると、自分の書で題字は無理だと思う。芸術に関わるものとして、無理だと判断した。作品の書のほうは、意味を考えながら描けるので、なんとかなるというくらいに気持ちである。笑って見て下さればと思う。

二〇〇五年二月十二日未明

草壁焰太

目次

はしがき

草壁焰太

2

一、海山	11
二、思い	33
三、春	65
四、宇宙	81
五、鳥	107
六、心	121
七、妻	147
八、岬	159
九、桜	169
十、志	183

自筆五行歌索引

456

二十一、世	431
二十、旅	413
十九、氷原	393
十八、生	359
十七、秋	343
十六、花	321
十五、山	297
十四、母	283
十三、浜	265
十二、螢	233
十一、木の實	217

本文書／草壁 焰太  
表紙装丁・書／寺本 一川

一  
海山

海山よ

私<sup>が</sup>会<sup>う</sup>た<sup>め</sup>に在<sup>っ</sup>た<sup>の</sup>か

君<sup>ら</sup>が私<sup>を</sup>

生<sup>ん</sup>だ<sup>の</sup>か

美<sup>し</sup>い青<sup>と</sup>緑

やあ

内海湾うちのみわん

ただ平らに光って  
私を育てたことを  
覚えてるかい

ふるさとの島は

まあ

見たこともないような

青と緑

来るたびに鮮やか



島影が

大波のように

重なり

瀬戸は

ひたひた夕暮れる

サヨリは

水よりも淡く

おのれを

渦の

ひとひらとして

白糸草の

説明文のなかに

私の名を

書いてくれている

友の花の本

宇宙は

ただ流転し

人は

海山を超え

生きようとす

もう十分

生きただろうと

浜の波

それは自分の

声であらうけれど

堀本